

## 書 評

J. K. ガルブレイス著，都留重人監訳

## 『不 確 実 性 の 時 代』

芦 田 起 久 雄

ガルブレイスの17冊目にあたる著作『不確実性の時代』(John. K. Galbraith; *The Age of Uncertainty—A history of economic ideas and their consequences*, Houghton Mifflin Company, Boston, 1977. 都留重人監訳, TBS ブリタニカ, 1978年)は, 本書以前の著作に比して執筆過程を異にしている。著者が「はじめに」でことわっているように, 3年間の製作期間をかけてBBC放送は番組の監修者としてガルブレイスをむかえ「不確実性の時代」という標題で, 13時間余りにわたるテレビ講座番組を作成した。そのさい, ガルブレイスが執筆した原稿台本をもとに加筆修正され, さらにテレビの番組で用いられた写真やイラストレーションの中から170点(邦訳では88点)を加えて生れたのが本書なのである。だから原書で365頁(邦訳では494頁)という大部な著作であるにもかかわらず, ガルブレイスの該博な知識と流麗な文章のおかげで一気に読破させる魅力を持った本に仕上がっている。

『不確実性の時代』という本書の標題についてガルブレイスは「前世紀の経済思想の中にあつた確固たる確実性を, 現代のもろもろの問題が直面している抜きがたい不確実性と対比」させるために, つまり「前世紀では, 資本家は資本主義の繁栄に, 社会主義者や帝国主義者は, それぞれ社会主義, 帝国主義の成功に確信をもち, 支配階級は, 自らが支配者たるべく運命づけられていると認識していた。こうした確実性は, 今やほとんど残っていない。」(邦訳2頁)と趣旨から選んだといっている。

しかし、別の箇所ではガルブレイスは「日本だけでなく世界全体がある種の“危機感”に直面していることは事実。しかし、私がこの本を書いた動機は、この危機は本当だろうか、われわれは、あまりにも目前のことだけにとらわれ過ぎているのではないか、という点を明らかにしたかった」（週刊ポスト第10巻第20号）と述べているが、この点については、本書がもともとBBC放送とガルブレイスとのいわば共作として生れたためもあってか、深く追求されているとはいえない。

ともあれ、確固たる信念をもつことが困難である現代の世相を反映したゆえか、本書は経済学者が書いた書物としては異常ともいえる多数の読者を生んだのである。（出版元によるとすでに48万部を突破しているということである。）

さて、ガルブレイスは「経済思想の発展を広い視野に立って跡づけ、われわれが現に社会生活について抱いている考え方に歴史的意義づけを与える」（邦訳付録）というBBC放送の要請にある程度沿って本書を記述している。つまり「最初に人と思想が存在し、次に思想の帰結が到来することになる。まずアダム・スミス、リカード、マルサスが登場し、次いで彼らの体系が、イギリス、アイルランド、新世界にどのような影響を与えたか。先に経済思想史が論じられ、続いて実体経済の歴史がとりあげられる」（邦訳3頁）という叙述方法がとられているのである。

本書は次の12章からなっている。

- 第一章 予言者たち、および古典的資本主義の約束
- 第二章 資本主義最盛期の風俗と風紀
- 第三章 カール・マルクスの異議
- 第四章 植民化の思想
- 第五章 レーニンと旧体制解体の時代
- 第六章 貨幣の盛衰
- 第七章 エリートの革命
- 第八章 破滅的な競争
- 第九章 巨大法人企業

## 第十章 土地と住民

## 第十一章 大都市地域

## 第十二章 民主主義・指導力・決断

この目次構成は、大きく第一章から第七章までと、第八章から第十二章までの二部に分けることができるであろう。

第一部においてガルブレイスは18・19世紀においては「社会経済体制の指導原理においては、人びとに確信を与えるような哲学ともいべきものがあり、それが体系性をもって人びとの判断力の支えとなっていたのに、現在では、そのような確信を持てる哲学がなくなってしまった」（監訳者あとがき、479頁）ことを経済思想と状況とのかかわりあいにおいて論述しているのである。

たとえば、経済学の開祖アダム・スミスは、国富は個人の自由な経済活動によって増大してゆく、つまり見えざる手に導かれて、そうなるのだという理論を展開したが、「今世紀になって、アダム・スミスの世界観は大きな痛手を受けた。その一部は、ケインズが指摘したように、思想の面からのものである。すなわち、マルクスの革命的な猛攻と、もう一つは、現代資本主義の不正を正しその不完全さをつぐなう最大の希望を国家に託す人びとの側からのもっと手ぬるい攻撃にほかならない。しかし、これら以上に大きな打撃が状況の変化から生じたのであって、それはケインズによって強調されなかった点である。……法人企業はスミスの世界とは肌の合わぬものであった。労働組合も同様である。……戦争と、それから武装され、技術を競い合う現代国家もまた、スミスの世界を変えた。」（50頁）といて第六章までで、それを跡づけるという手法をガルブレイスはとっているのである。

第七章「エリートの革命」において、ガルブレイスは、ケインズ革命を扱っている。ケインズの経済思想についてのべたあと「ケインズ体系の本質は、失業をなくすことにあるのだ。われわれは、直接行動で、企業の価格や労働組合の賃金の上昇を止めることができる（私はずっと以前から、

そうした行動が避けられないだろうと考えてきた。)しかし、そうしたとすれば、保守主義者ケインズが意図したようには、市場の制度を手つかずのままにしておくことはできまい。それは、多くの人が直面したがない革新的変化の前兆となる。」(303頁) というのである。

第二部にあたるところでガルブレイスは、時論といってもいい問題について論を進めてゆくのである。それは、すでに「新しい産業国家」でガルブレイスが詳細に展開した議論を、さらに飛躍させたとはいいいがたい。本書においては、第九章であつかわれている問題だが、ここでは「巨大法人企業」こそ「不確実性の主要な源泉である」として、法人企業における神話のヴェールをとりぞき、現実をかいまみせるのである。

その際「法人企業はそれぞれに違っているので、……数多くの会社の現実から抽出して、法人企業の発達や現代の法人企業の性格をいちばんよく描く歴史を合成」(351頁)して「統合世界企業」(UGE)という「存在するが実在しない」モデルを設定することによって分りやすくその自己運動を展開していくのである。

このように、巨大法人企業という組織の立場から、ガルブレイスは議論を進めていくのであって、それは「法人企業が国家に従属させうるものであること、したがってそれは公益に服従させうるものであることを前提としている。しかしながら、法人企業は、それによって統御すべき当の公的機関である国家のなかで強力なのだ。確かに、ここに矛盾がある。そもそも法人企業を統御する立場にある公的機関を法人企業自体が統御しているのであったら、その法人企業はどうやって統御されうるのであろうか。」(378頁)というところにまで議論が進んでしまうことになるのである。

もともと「政治経済学」は、時論的な観点をひきだすための導入部としての役割をになっていた。とするならば、第二部におけるガルブレイスは、時論をつくりだす空気をかもしだす仕掛人としての役割は十分果しているといえよう。

もともと、BBC放送との共作といえる形で生れた本書は、ガルブレイス本人が、さまざまな形で登場してくるのも興味深い。「土地と住民」を

語るときには、自分の故郷を、「エリートの革命」では、ハーヴァード大学でケインズ理論を摂取したころのこと、ケネディと知りあったエピソード、「破滅的な競争」では、戦時中、戦後のベルリンにいた時の情景など、ガルブレイスの生の経験と状況とのかかわりがいたるところにちりばめられている。

だから、本書は一面ガルブレイスの「自叙伝」としての体裁をとっているといってもよいであろう。そこでは、経済と政治の交錯した世界がなまなましくうつしだされているのである。だからまたそれは、貴重な現代史のドキュメントとしての側面を持っているともいえよう。

このように、いろいろな面から本書は読むことができる。その意味において、経済学を学んでいる者にとっては、本書から入ることによって、研究を深め討議をよびおこす格好の題材をガルブレイスは提供しているといってもよいであろう。